

# 「陥没する世界のなかでの『しあわせ』論」

西部 邁著

この著者は、安保闘争の挫折以後、経済学に社会学的方法を導入し、一貫して「伝統（母語を基盤とする民族の背負ってきた歴史）」と「公共性（道徳をもとにした共通価値観）」の重要性を問うてきた著者が、コミュニティや市場など、戦後最も深刻な危機状況に曝される若者へ訴える人生論だ。

まず著者は、現代を経済にあってはマモノイズム（拜金主義）、政治はポピュラリズム（人気主義）、文化はピュエリリズム（幼稚主義）とし、大衆が表層的に動く社会の負の側面が凌駕する実態を批判する。

そんな中、「負け組であることに誇りを持って」とエールを送る。平等主義が得てして画一主義に陥る危険性を上げ、「平等の理想と格差の現実」の間で、いかにして個人が社会価値を見出しバランスをとるかが鍵と説く。その根底には、そもそも社会が相互扶助と排除の両面があり、「負け組」という限界状態に立つことで金銭では購入できない本来、人間の持つ普遍的な価値（真、善、美）に目覚めるというのだ。

しかも著者は具体的政策の提言も怠れない。社会は市場化不可能な財としての「公共活動」を活発にし、ローリターン（低収益）、ローリスク（低危険）の資金利用を活性化させ、ローレ

## 「負け組」にエール送る人生論

ユニウ（低収入）ではあるがハイパブリックネス（高公共性）の雇用を増やすべきだとする。

『自律せる地域に自立した人間が棲む』『人の心奥には祖国が横たわっている』『集団帰属なければ自己実現なし』など少々古めかしい小見出しを見ると、戦後六十四年、日本において保守的彩りを持つ思想を貫くことは、意外に困難だったのではないかと思えてくる。なぜなら知の世界でさえ、商品開発と同じく常に新しさが要求され、舶来もののファッション（流行）のごとく意匠化された記号が大量消費されてきたからだ。揺れ動く時代だからこそ、使い古されてきた言葉を再度咀嚼し、「日本人」であることの意味と可能性を考えてみるのも悪くないのかもしれない。

評・宮本誠一（NPO法人夢屋プラネット代表）

ジュールダン・1575円

